

子どものSOSを「見逃さない」ために

～ 「アンケート」と「5分間ショート面接」を活用した「よりよい人間関係」の構築 ～

生徒指導・特別支援教育部 専門主事 伊藤 卓也

平成24年(2012年)8月7日に県知事と教育委員長の連名による「“いじめを見逃さない長野県”を目指す共同メッセージ」が発信された。「あなたが、いじめを見かけたら、また自分がいじめを受けたら、勇気を出して、できるだけ早く、誰か身近なおとなに相談してください。」「あなたの声をちゃんと聴くことができるように、私たちは、これから一生懸命に努力します。」

今こそ、日常の教育活動の中に、「よりよい人間関係」の構築を目指す「意図的」かつ「組織的」な取り組みが求められている。本研究においては、「教師と児童生徒の人間関係」の構築をテーマとした提案をしたい。子どものSOSを「見逃さない」ために…

(キーワード) 信頼関係 よりよい人間関係 アンケート 5分間ショート面接 職員研修

I テーマ設定の理由

子どもから大人へと急激な成長を遂げる児童期や青年期は、児童生徒の誰もが、様々な「不安」や「悩み」を経験する時期である。そのような「不安」や「悩み」は、「いじめ」「不登校」「非行」といった具体的な問題として表出する場合もあれば、教師の日常の行動観察や児童生徒の提出物等の表現をとおして発見される場合、友人や保護者から指摘されたり相談されたりして気付く場合等、様々なケースがある。生徒指導提要(文部科学省平成22年3月)にも記述されているとおり、「いじめ」や「不登校」は「どの子にも、どの学校においても」起こり得る。児童生徒の抱える課題を少しでも早く発見し、それらの課題に起因する問題が、複雑かつ困難になる前に適切な指導や支援をするためには、教師と児童生徒の信頼関係が大前提であり、日常(問題が発生する前)における「よりよい人間関係」の構築を目指す意図的な取り組みが重要である。

[生徒指導提要 第6章 第6節 いじめ いじめ問題の理解]

いじめは児童生徒の心身の健全な発達に重大な影響を及ぼし、不登校や自殺、殺人などを引き起こす背景ともなる深刻な問題です。しかも、最近のいじめは携帯電話やパソコンの介在により、一層見えにくいものになっています。教員は、いじめはどの子にも、どの学校においても起こりえるものであること、また、だれもが被害者にも加害者にもなり得るものであることを十分に認識しておく必要があります。

[生徒指導提要 第6章 第12節 不登校 不登校の定義とこれまでの変遷過程]

不登校は「何らかの心理的、情緒的、身体的、あるいは社会的要因・背景により、児童生徒が登校しないあるいはしたくともできない状況にあること(ただし、病気や経済的な理由によるものを除く)」(中略)いじめや発達障害、保護者による虐待などが背景にあるケースなど、質的にも多様化がすすんでいます。こうした事態を受け、不登校はもはや特別な状況下で起こるのではなく「どの子にも起こり得る」ととらえることの必要性が確認されました。

また、適切な指導や支援をする過程においては、「組織的」な取り組みという視点も重要である。教師による「日常の行動観察」をはじめ、「アンケート調査」や「面接」等、児童生徒の実態把握に関わる取り組みは、これまでも学校教育活動の中で実践されている。しかし、様々な社会的背景や要因による『学校の多忙さ』の中で、学校は機能的かつ効果的な方略を見出せないという現状もあるのではないだろうか。

本研究をとおして、学校の実情に即した「意図的」な取り組みの一例として、教師と児童生徒の「よりよい人間関係」の構築を目標とした「アンケート」と「5分間ショート面接」の効果的な活用方法とともに、その取り組みを学校において「組織的」な展開にするための提案をしたい。

Ⅱ 研究の内容

1 「いじめ対応に係る学校訪問のまとめ」の分析と考察

平成 24 年 8 月 7 日に県知事と教育委員長の連名により発信された「“いじめを見逃さない長野県”を目指す共同メッセージ」を具現化するため、教育委員会定例会（平成 24 年 10 月 18 日）において、県教育委員会教学指導課心の支援室が公表した「いじめ対応に係る学校訪問のまとめ」には、学校訪問の際に聴き取った「いじめ」に係る学校の指導や支援についての困難点、問題点、工夫、課題等が、校種別（小中学校、高等学校、特別支援学校）にまとめられている。

(1) 校種を問わず共通する報告について要点を抜粋

【困難点】 ・インターネット上のサイトやブログへの誹謗文書の書き込みなど、<u>被害側の児童生徒からの訴え、加害側の児童生徒からの申し出、目撃した児童生徒からの情報提供等がない限り、表面化しにくい事案が増えている。</u> ・一度解決したと思われていた事案が水面下で継続しているケース。 ・加害側と被害側の立場が逆転して再燃するケース。
【対応策】 ・日頃から<u>児童生徒の様子を把握する体制を整える。</u> ・<u>個に応じた支援をする。</u>
【参考となる取り組み】 ・情報提供 BOX（SOS 郵便、相談箱等）を校内に設置する。 ・保護者からの訴えや情報提供の窓口を設ける。 ・年に数回の面接週間や教育相談日を設ける。 ・相談カードを用いて、相談したい「時間」と「教師」を児童生徒が決めて相談する。 ・昼食時間に 3～4 人ずつ教師と食事をしながらコミュニケーション（情報交換）する。 ・アンケートを実施する。

(2) 高等学校に着目して要点を抜粋

【いじめに特化したアンケート調査の実施】 小学校 85.8%，中学校 88.3%，高校 57%
【いじめ対応マニュアルの有無】 小中学校 91.8%，高校 41.9%
【職員研修の実施】 小中学校 96.1%，高校 61.9%
【高校におけるいじめ発見のきっかけ】 ・<u>認知件数 130 件中 67 件が本人からの訴えによる（平成 23 年度児童生徒の問題行動等生徒指導上の諸課題に関する調査）ことから、相談室を他の部屋とは別に独立させて設置する等、生徒がいつでも安心して相談できる環境を整備することは、いじめの未然防止及び早期発見に有効である。</u>

児童生徒へのインターネットや携帯電話（スマートフォン）等の普及の影響もあり、初期の段階における問題（トラブル）の発見が困難なケースが増えている。一方、児童生徒にとって相談しやすい環境を整えば、本人やその友人から問題の発生を報告してもらえる可能性が高いというデータもある。

(3) 上記分析を踏まえた自身の考察

以上を踏まえ、日常（問題が発生する前）の教師と児童生徒の「よりよい人間関係」の構築と「個に応じた支援」を実現できる意図的な取り組みを、組織的に展開することが求められていると考える。そのための取り組みの一例を以下に提案する。

2 「アンケート」と「5分間ショート面接」を活用した信頼関係の構築

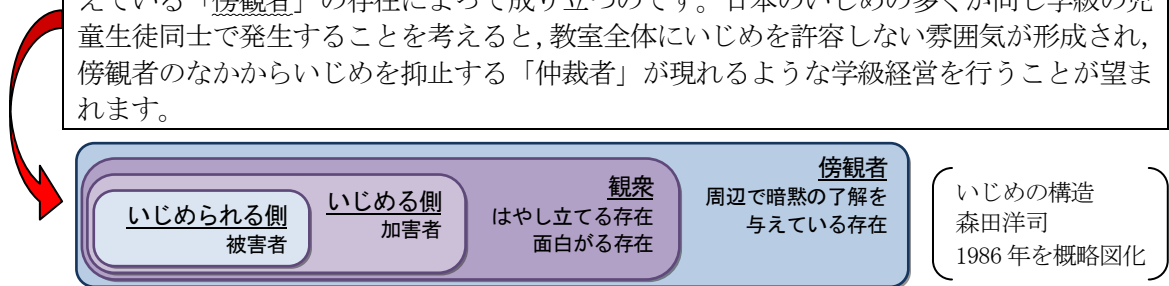
(1) 提案の骨子

目標を明確にするため、提案の骨子を以下のように設定した。

- ・相談しやすい雰囲気づくりをする。
(教師と児童生徒の「よりよい人間関係」の構築を目標とし、問題が発生する前に実施する。)
- ・児童生徒が困ったときの相談窓口を複数確保するための取り組みにする。
- ・いわゆる「傍観者※」が「情報提供者」や「支援者」となるような取り組みにする。
- ・緊急性の高い状況について素早く対応できる取り組みにする。
- ・児童生徒全員に情報提供(実態把握)を呼び掛けるとともに、情報提供者の秘密を守る。
- ・機能的かつ効果的な取り組みにする。(児童生徒や教師に負担が掛かりにくい工夫をする。)
- ・指導の「経過」や「実績」を記録として残す。(記録を保管する。)
- ・意図的かつ組織的な取り組みにするための職員研修を実施する。

傍観者※〔生徒指導提要 第6章 第6節 いじめ いじめの構造〕

(中略) いじめは、いじめる側といじめられる側という二者関係だけで成立しているのではなく、「観衆」としてはやし立てたり面白がったりする存在や、周辺で暗黙の了解を与えている「傍観者」の存在によって成り立つのです。日本のいじめの多くが同じ学級の児童生徒同士で発生することを考えると、教室全体にいじめを許容しない雰囲気が形成され、傍観者のなかからいじめを抑止する「仲裁者」が現れるような学級経営を行うことが望まれます。



(2) 研究の成果(概要) (詳細は別紙を参照)

【職員研修用資料】

- ・取り組みの「概要」「留意点」「実施方法(例)」をまとめた資料を作成した。
- ・A4サイズ2ページ(A4両面印刷1枚)に内容を精選した。

【アンケート用紙(例)】

- ・児童生徒の実態把握(情報収集)や5分間ショート面接の基礎資料にするため、質問項目を精選したアンケート用紙を作成した。(高等学校における実施を想定した一例)
- ・各質問項目の横に目盛を設けたが、数値による集計や評価は考えない。
(児童生徒の繊細な心理状況を把握し、面接につなげることが目的である。)
- ・名簿順等に蓄積(ファイリング)することで、指導の経過や実績を記録として残す。

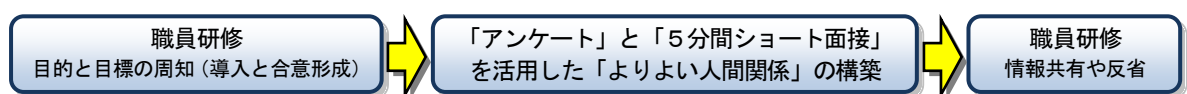
【スライド資料】

- ・職員研修の際に活用できるスライド資料を作成した。
- ・職員研修で伝える(伝えて欲しい)要点をまとめた講師用ノートを作成した。

(3) 意図的かつ組織的な取り組みにするための活用イメージ

組織的な取り組みにするためには、目的と目標を周知(導入と合意形成)する必要がある。また、実施後に成果を踏まえた情報共有や反省をすることも重要である。

そのため、実施の前後に職員研修を位置づける提案とした。



(4) 指導の「経過」や「実績」を記録として残す。(記録を保管する。)

記述の有無に関わらず、アンケート用紙とともに個別面接の状況や対応等のメモを、指導の経過や実績として記録に残す(保管する)ことも、その後の指導や支援のために重要である。

(5) 学校現場への還元策

- ・当センターの「センター研究発表会」において研究成果を発表する。(本年度)
- ・当センターの「ホームページ」に掲載して資料等のダウンロードを可能にする。(本年度)
- ・当センターの「生徒指導研修(指定研修および希望研修)」において活用する。(次年度)
- ・要請のある学校に出向き、「校内研修支援」において活用する。(次年度)

(6) 客観的評価

本年度の研修講座において研究成果の一部を活用した。

受講者からの4段階評価結果と評価理由の記述(抜粋)は以下のとおり。

【質問1】学校現場で具体的に活用できると思いますか。(4段階評価)

活用できそう 1	2	3	活用は難しい 4	平成24年11月30日まで 回答数のべ114名
71.1%	15.8%	13.2%	0.0%	

【質問2】上記4段階評価の理由について記述してください。(要点を抜粋)

「日常の人間関係づくりの大切さを再認識した。」 「教育相談が効果的になりそうだ。」

「傍観者との関係づくりや、傍観者を味方にするという視点は大切だと思った。」

「今までのアンケートに落ちがあったことに気付いた。」

「1人5分で1日3人(放課後15分)ならば実施可能だと感じました。」

「アンケートは内容とともに実施時期の工夫が必要だと感じた。」

「クラス運営の最初の一步として取り入れたい。」 「明日からでも実践できそう。」 など

Ⅲ 研究の成果と課題

本研究をととして、これまでに自身が担任や生徒指導係として実践してきたことを、体系化してまとめることができた。前述したとおり、「児童生徒の実態把握」「個に応じた指導や支援」「早期発見と早期対応」等の成果は、教師と児童生徒の信頼関係によって大きく左右される。本研究における提案は、「よりよい人間関係」の構築を目標とした意図的かつ組織的な取り組みの一例である。各学校において、特定のクラス等による実施ではなく、学年として、学校として活用されることを願い普及に努めたい。

Ⅳ おわりに

当センターに寄せられる要望として、「児童生徒への指導や支援のための具体的な教材や指導資料を提供して欲しい」という意見が多い。しかし、インターネット等で検索をすれば、文部科学省をはじめ、各都道府県教育委員会や各種団体等が作成した様々な教材や指導資料が公開されている。このような「有意な情報」が「散在」している現状を踏まえると、県内外を含め、公開されている優れた教材や指導資料について一括閲覧することのできる長野県版「教育ポータルサイト」を整備することが有効であると考え。本研究の成果を、当センターホームページ等から現場に発信することはもちろんであるが、「教育情報の提供に関わる環境整備」を次年度以降の自身の課題とし、本年度の研究報告としたい。

【参考文献・引用文献】 文中の_____部は、筆者(伊藤)による

(1) 文部科学省

平成22年3月 生徒指導提要

http://www.mext.go.jp/b_menu/houdou/22/04/1294538.htm

(2) 文部科学省 国立教育政策研究所

平成23年3月 生徒指導の役割連携の推進に向けて

平成24年9月 生徒指導リーフ

Leaf.7 いじめの理解 Leaf.8 いじめの未然防止Ⅰ Leaf.9 いじめの未然防止Ⅱ

http://www.nier.go.jp/04_kenkyu_annai/div09-shido.html

(3) 長野県教育委員会 教学指導課 心の支援室

いじめ対応に係る学校訪問のまとめ

<http://www.pref.nagano.lg.jp/kenkyoi/teireikai/949/949-5.pdf>